令和３年５月３日　資料

「起きねばや（鳥とて雪をふるいたつ）」

「身も心も放ち忘れる（投げ入れる）」

これが即、「竪起脊梁（背骨を立て起こす）」であり、「正身端坐」。

これを今ここで生きる（この絶対矛盾の自己同一を今ここで生きる）。

◎ゲーテの言葉

①●『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』　「フィディアス」は３巻18章。

　諸芸術はまた**自分自身から多くを生み出し、他方、自然が完全となるに欠けているものを数多く付け加える**、――芸術は自分自身のうちに美をもてるがゆえに。それゆえに**フィディアス**は、何ら肉の眼に見ゆるものを模倣したのではないが、神を刻むことができた。彼は、もしツォイスがわれわれの眼にふれることもあったらこうもあらわれたであろうという姿を心のうちに捉えたのである。

●『ヴィンケルマン』（芦津訳）

②　ひとたび芸術作品が産み出され、その理想的な現実とともに世に姿を見せるや、それは持続的な効果をもたらし、最高の効果を発揮する。

なぜなら芸術作品とは全体の力から精神的に展開されるものであり、それゆえ**すべての卓越したもの、尊敬と愛に値するものを取り入れ**、**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。

③　私たちが古代人の叙述、報告、証言などから解明できるように、かつて**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

人間を神に高めるために、神が人間になったのである。彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

④　この意味において私たちは、「**この作品を見ずに死ぬのは不幸である」と心からの確信をもって語った**古代人たちを是認すべきであろう。…

⑤　友情と美の二つの要求が同時に一つの対象において満たされるとき、人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝（Anhänglichkeit und seiner Verehrung）のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。

●『ドイツ彫刻家協会』1817年７月２７日（新井靖一訳）

⑥　しかしながら、造形芸術においては**考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である**、この理由から彼は非常に古い時代の遺物に心を向けなければならない。

**（zu denken und zu reden ganz unzulässig und unnütz ist）**

⑦　そしてそういうものは何といってもペイディアスとその同時代人の作品のうちにしか見出すことができないのである。現在われわれはきっぱりとこのように言うことができる。というのも、この種の申し分ない遺物がすでにロンドンにあるからであり、したがってわれわれはどの造形芸術家にもただちに**適切な典例**を指示することができるのである。（**die rechte Quelle［泉、根源］**）

⑧　**それゆえドイツのいかなる彫刻家も、己れの自由にしうる資産のすべてを使って、あるいは友人、後援者、その他の偶然によって彼に与えられるすべてを利用して、英国に旅し、そこにできるだけ長く滞在するようにせねばならない**。というのも、彼の地ではまず第一にエルギンの大理石像が、次いでかの地にあるその他の、博物館に併合されているコレクションが、**およそ人類の住む世界においてこれ以上のものは見出されないような機会を与えてくれるからである**。

⑨　彼の地についたなら彫刻家はなにをおいてもまず**パルテノン**とフィガリア**神殿のほんのわずかな遺物をも大いに気を入れて研究してもらいたい**。（**studiere er vor allen Dingen aufs fleißigste**）

●『プロピュレーエン』序言（1798年）（新井靖一訳）から。

⓾　どんなにひどい絵でも感覚と想像力に訴えることができる。それは、そのような絵でも感覚と想像力を動かし、解放し、自由にさせてくれるからである。**最高の芸術作品**もまた感覚に訴えかけるが、それは**より高次の言葉**であって、われわれはむろんこの言葉を理解しなければならない。**そのような芸術作品は感情と想像力を束縛し、われわれの恣意を奪う**。**われわれは完全なものを、好き勝手に処理し、支配することはできない。われわれはそれに自分を委ねないわけにはゆかないのだが、そうすることによってわれわれは高められ、改善され、ふたたび自己を手に入れるのである**。

⑪（芦津訳「**それは感情と構想力とを束縛し、私たちの恣意を奪い去る。私たちは完全なものを意のままに統御し、支配することはできず、そこに身を委ねることを強いられる。それによって高められ、改革され、ふたたび自己自身を獲得するのである**。」）

⑫　なんらかの知識にたずさわる人は、**最高のものを目指すべきである**。知的理解と実地の仕事とは大いに違っている。というもの、実際の仕事においては誰でも、自分にはある程度の力しか与えられていないことをやがては知ってそれに甘んじなければならない。ところが知識や知的理解となるとずっと多くの人たちにこれを持つ能力があるからである。それどころか、**自分を捨てて、対象につくことのできる人、強情で、偏狭な我意をはって自己とそのつまらぬ偏見を自然と芸術の最高の作品のなかへ持ちこもうとしない人であるならば誰でも、そのような能力がある**と言えるのである。

⑬（芦津訳「**自己を空しくして対象に従うことのできる人、頑固で偏狭な我意を通し、自己とそのちっぽけな偏見を自然と芸術の最高傑作のうちに持ちこむようなことをしない人ならば、誰しもその能力を有している**と言える。」）

●「博物学の図解一覧、とくに骨学の図解にたいする要望について」（1819年）

⑭　**芸術家は実は根源の馬（Urpferd）を創ったのである。彼がそのような馬を実際に眼で見たのか、心のうちで作り上げたのか、そのどちらにせよ。すくなくともわれわれには、それは最高の詩の心と現実の感覚において描写されているように思われる。（**sheint es **im Sinne der höchsten Poesie und Wirklichkeit dargestellt zu sein）**

●「ラオコーンについて」（芦津丈夫訳）

⑮　真の芸術作品は、自然の作品と同じように、私たちの悟性にとってつねに計り知れないものである。それは観照され、感知される。それは心に働きかけるが、真に認識されることはなく、その本質や価値が言葉で表現されることは、なおさら稀である。

●「さらに一言、若い詩人たちのために」（死後に発見された遺稿）（小岸昭訳）

⑯　ところで、なによりも肝要なことを手短かに述べておこう。若い詩人は、たとえそれがどんな形態をとるにしろ、**生きて働きつづけているものだけを表現せよ**。**いっさいの否定的精神、いっさいの悪意や悪口を、そして否定するしか能のないものをきびしく排除せよ**。**というのも、そうしたものからは何物も生れてこないからである**。

●エッカーマン『ゲーテとの対話』（第三部1828年3月11日）

⑰　つまり天才というのは、神や自然の前でも恥かしくない行為、まさにそれでこそ**影響力をもち永続性のある行為を生む生産力にほかならない**のだ。モーツァルトの全作品は、そうした種類のものだ。あの中には、世代から世代へと働きつづけ、早急には衰えたり尽き果てたりすることのない生産力があるのだよ。そのほかの偉大な作曲家や芸術家についても同じことがいえるよ。**フェイディアス（Phidias）**やラファエロは、その後何世紀にもわたって影響を及ぼしたではないか！　…　**生産的な影響を与えつづけないような天才は存在しない**からだよ。